



## 教養をさらに深める本

### ◆赤祖父俊一著

#### 『正しく知る地球温暖化』

(誠文堂新光社)

氷が融け、溺れそうな北極熊の映像に心を痛めた人も多いのでは?いま北極圏では寒冷化によるオゾン層破壊が進んでいます。報道によると、これもまた地球温暖化が原因ということになるのですが…。気候変動は実は一般の人にはかなり理解しにくい現象なのですが、本書はそれを分かりやすく解説しています。著者は元アラスカ大学国際北極圏センター所長で、北極圏気候の専門家。気候変動を異常気象と言って煽る報道の方が異常だということにも気づかせてくれる一冊です。

### ◆久根達郎編 『漱石人生論集』

(講談社文芸文庫 講談社)

漱石に人生論集という著書はありません。この本は漱石の最高の読み手である久根達郎が編集したものです。人が筋を通して生きることは、結局は他人に最大の敬意を払うことになると教えてくれます。

### ◆『古今和歌集』

(新日本古典文学大系 岩波書店ほか)

「古典」や「韻文」も読んでみましょう。「韻文」は詩の言葉による表現です。日本の韻文の古典である『古今和歌集』は、面白く読めるようになるまで努力が必要なのですが、そこを越えると一生楽しむことができます。自分がいかに「古今和歌集的」であるかという意外な事実もわかってくるでしょう。

### ◆我妻栄著

#### 『法律における理窟と人情』

第2版 (日本評論社)

法律学の勉強は、理窟と人情とのバランス感覚を学ぶことに尽きます。著者我妻栄は、昭和に「民法と言えば我妻、我妻と言えば民法」とまで讃えられた民法学者です。わかりやすく、おもしろく、かつ、生涯ここに残る本です。ぜひ一読してみてください。

### ◆サミュエル・スマイルズ著 竹内均訳

#### 『自助論』 (三笠書房)

「天は自ら助くる者を助く」自分で自分を助けられない人を一体誰が助けてくれようか。自分で自分を信じられない人を一体誰が信じてくれるだろうか。全ての基本は、自分の足で立つこと、「自立」にあります。明治の先達にも愛された名著の現代語訳版。困難に立ち向かい、人生を切り拓く勇気を新たにしてくれるはずです。

### ◆ヴィクトール・E・フランクル著

#### 霜山徳爾訳 『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録』 (みすず書房)

「どんな苦しみにも、どんな人生にも意味がある」

本書はナチスの強制収容所から生還した著者の体験記です。精神科医であった著者が極限状況における人間の姿を分析し、「人間とは何か」という問いを追求した作品です。著者の発するメッセージは、時代を超えて人々を勇気づけています。



◆フィリップ・J・デーヴィス、  
ルーベン・ヘルシュ著 椋田直子訳  
『デカルトの夢』(アスキー)

17世紀フランスの哲学者であり数学者でもある、ルネ・デカルトはあらゆる知的活動が論理的演算によって処理できる世界を夢見しました。コンピュータの出現によって世界は大きく変えられましたが、私たちの生活の向上に役立っているのでしょうか。コンピュータ哲学への大きな第一歩を踏み出してみませんか。

◆隈健吾著『建築家、走る』  
(新潮社)

建築界の第一線でグローバルに活躍する隈健吾。建築についての知識だけでなく、建築を通して見えてくる現代の歴史・社会・文化に関する教養を授け、建築をめぐる哲学的思索へと導いてくれる一冊です。

◆小川鼎三著『医学の歴史』  
(中公新書 中央公論新社)

医学や医療をこれから学ぶ上で、その歴史的意義を知ることは大切です。古代の医療がどのようにして現代我々が学ぶ医療に発展したか、ヨーロッパだけでなく、中国や日本における医学の歴史を分りやすく示した好著です。

◆中田宏著『なせば成る  
一偏差値38からの挑戦一』  
(講談社+α文庫 講談社)

この本では、人生をより良く生きるための「考え方」が、著者の赤裸々な体験を通して語られています。人間の能力とは何か、勇気や忍耐の大切さなど、多くのことを教えてください。まさに、己の道を切り開いています。是非とも一読を。

◆桐衣朝子著『薔薇とビスケット』  
(小学館)第13回小学館文庫小説賞受賞作  
(福岡大学人文学部文化学科卒業)

どんな人にも若々しく煌めく時や人生の喜びや苦しみを噛みしめる時間があります。介護が必要になった人々にも、亡くなった人々にも。本書は、25歳の若い介護士が体験した、お盆の夜の奇跡を描いた小説です。人生に未熟で、生活のためだけに仕事をしていた彼が、この夜なにを見て、そしてどう変わっていくのか。読みやすく、読後感爽やかな作品です。

◆レイモンド・マンゴー著 中山容訳  
『就職しないで生きるには』  
(晶文社)

本書は1979年にアメリカで出版され、若者必携のテキストとして現在も読み継がれています。決して働かないことの奨めではなく、自分が納得できる仕事をするためのヒントやゼロから起業する知恵や勇気を与えてくれる本です。仕事について、生き方について考えてみたいとき、手にとってみませんか。

◆戸田山和久著『新版 論文の教室  
—レポートから卒論まで』  
(NHK ブックス)

論文を書くには、自分で考え、自分の意見を持つことが何より大切です。しかし、そのためにもどうすればいいのかわからなくて困ってしまうことはありませんか。そんな時にはこの本がお勧めです。読み進めるにつれ、論文の書き方だけでなく、その前提となるものの考え方や意見の導き方について理解が深まること請け合いです。単に人の考えや意見を借り受けるのではなく、自分自身で考える力、自分自身の意見を育む技術を、ぜひこの本で身につけてください。